

第三章 敵のイメージ —ギリシア人によってつくられたクセルクセス像—

はじめに

アケメネス朝第四代の王クセルクセスは自ら軍を率いてギリシアに遠征し、サラミスの海戦に敗れて敗走した人物として有名である。ギリシア遠征に関するペルシア側の記録は残されておらず、ヘロドトスなどのギリシア人歴史家によって後世に伝えられている（阿部拓児、「ペルシア帝国期小アジアにおける文化・社会・歴史叙述」（博士論文、京都大学）、二〇〇八年、一三八 - 九頁参照）。ギリシア人が描くクセルクセス像は極めて否定的で、傲慢かつ尊大であると同時に柔弱かつ放縦というオリエントの君主像の原型であり、このようなクセルクセス像が近代に入っても踏襲され今日に至っている（阿部、二〇〇八年、一四〇頁；T. S. Brown, 'Herodotus' portrait of Cambyses', *Hist.* 31, 1982, pp.387-8）。しかし敵を非道と描くのは必ずしも古代ギリシア人の専売品と限らず、現代においてもそのように描かれマスコミを通じて宣伝されている点では変わっていない（土田泰子、「第一次世界大戦期における米国プロパガンダ・ポスター研究—その説得の心理過程とレトリックおよび社会的文脈についての考察—」（新潟大学）、二〇〇六年）。傲慢さと柔弱さの二面をもつクセルクセス像は古代ギリシア人が創り上げ、宣伝したものである。

これは極めて政治的な像であって、歴史の中のクセルクセスとは大きく乖離してしまっていると考えられる。記号化されたクセルクセス像がペルシアに対してギリシア人、少なくともアテナイ人の優越感とペルシアに対する侮蔑の感情を掻き立てる効果を狙ったものであることは容易に想像できる（土田は戦時プロパガンダの機能を「記号化したイメージは、見る者の反射的な感情を喚起する役割を果たし、文字メッセージと連動して見る者の判断を方向付け」ることにあると見ている（一六〇頁））。本稿はペルシア戦争を戦ったギリシア人（とりわけアテナイ人）のプロパガンダの呪縛を脱し、クセルクセスを歴史の文脈の中に置き直すことを目的としている（P. Briant, *Histoire de l'empire perse: de Cyrus à Alexandre*, Paris, 1997, pp.531-585 (P. Briant, *From Cyrus to Alexander: A History of the Persian Empire*, translated by Peter T. Daniels, Winona Lake, 2002, pp.515-568). G. Cawkwell, *The Greek Wars: The Failure of Persia*, Oxford/ New York, 2005, pp.87-138. 伊藤義教、『古代ペルシア』、岩波書店、一九七九年（第二刷）、一一五-一五六頁。中井義明、『古代ギリシア史における帝国と都市 - ペルシア・アテナイ・スパルタ - 』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年、一七-一一七頁。馬場恵二、『ペルシア戦争：自由のための戦い』、教育社歴史新書、一九八二年。）。

問題の所在

前四八〇年にクセルクセスが軍を率いてギリシアに遠征したのはアケメネス家の伝統に従ったものと言える。初代のキュロス以来、歴代のペルシア王は大規模な遠征の際には軍と行動を共にし、その結果として帝国の領土を拡張してきたのである。軍を率い、領土を拡張すること、この二つは当然のこととして伝統と国民が「諸王の王、諸国の王」を称するペルシア王に求めてきたものである（Aesch. *Persae*, 754-756 を参照）。クセルクセスも登極の後父の遺志を継いでエジプトの反乱の鎮圧に着手し（Hdt. 7. 5. 1 ではクセルクセスはエジプトの反乱を未だ鎮圧していないことになっているが Hdt. 7. 25. 1 ではエジプト人にギリシア遠征への準備を命じている。）、ギリシアに遠征している（Hdt. 7. 20. 1.）。バビロンで起きた反乱をメガビュゾスの尽力で平定したという伝承も遺されている（Ctes. F13 (26)=FGH. 688 F13 (26)はクセルクセスの時にバビロンの反乱が鎮圧されたとしている）。従って、彼以前の王たちと何ら異なることなくクセルクセスは伝統とペルシア人が求める要求に忠実に従ったと評価できよう（ファラオの称号や「バビロンの王」という称号は反乱鎮圧後に名乗らなくなり、クセルクセスの称号は「パールサとメディアの王」という称号に変化している。）。

しかし何故か後世の歴史においてクセルクセスの評価はキュロスやダレイオスと較べて極めて低いと言わざるを得ない（J. Abbott, *Famous Characters of History: Xerxes*, 2003, p.51 でクセルクセスは誇り高く高慢であるが、雅量があり、自信と希望に満ちた若者と評されている）。それは何故なのだろうか。まずはクセルクセスの一般的なイメージを卑近な例から取り上げてみよう。

二〇〇七年に公開されたハリウッド映画の『300 スリーハンドレッド』は記憶に新しいところである。この映画が描くクセルクセスは西欧が長く抱き続けてきたクセルクセスの否定的なイメージの一例でとなろう。ブラジル出身の俳優ロドリゴ・サントロ（Rodrigo Santoro）が演じるクセルクセスは半裸体で華美な装飾品を様々に身にまとい、尊大かつ傲慢、残忍である反面、柔弱で怯弱ですらあり帝国のデカダンスを象徴しているという印象を受ける（Megatronika というブロガーは驚きの書き込みをしている。その中で彼が演じるクセルクセスを「気持ち悪い creepy」と評している：<http://www.imdb.com/name/nm0763928/board/nest/82754214?p=4>）。演出によって過剰に醜悪に描かれているが、西欧が長くクセルクセスに対して抱いてきた伝統的なイメージの延長線上にあるといっても間違いではあるまい。

では何故クセルクセスはこのように描かれねばならないのか。それはギリシアに遠征し、そしてテルモピュライ、アルテミシオン、サラミスにおいてスパルタやアテーナイなどのギリシア本土の諸都市と戦い、最終的にプラタイアとミュカレーで敗れ去ったからであろう。テルモピュライではレオニダスの克己と自己犠牲の前に苦戦を強いられ、サラミスではテミストクレスの洞察と知略

に敗れ、将兵の多くを敵地に残置したままアジアに引き上げている。アテーナイを中心とするデロス同盟軍の反撃に為す術を知らず、ペルセポリスなどの王都における建設活動とマシステスの妻に対する劣情から引き起こされた悲劇的事件に象徴されるように、苦境に立つ帝国を防衛しようとせずハーレムと虚栄に心を奪われ、宦官に操られるまま最後を迎えたと冷笑を浴びせられるのである(Hdt. 9. 108. 1-113. 2 : マシステス事件; Ctesias, F13 (23) =FGH. 688 F13 (23) : クセルクセス暗殺)。

3Ubrij (傲慢) という言葉がクセルクセスには付きまとう。クセルクセスは神が定めたアジアとヨーロッパの自然の境界を越え、これら二つの世界を不遜にも一つの帝国に統合しようとしたのである (Aesch. *Persae*, 745-750)。そしてギリシアの自由と文明を脅かした張本人としてギリシアの歴史家たちは位置付けてきた。

しかしこのように語られてきた敵役としてのクセルクセス像には数多くの問題がある。ギリシア世界に脅威を及ぼしたのはクセルクセスだけであったのか。キュロスはリュディア王国を滅ぼしたとき小アジアのギリシア人を「奴隷化」しなかつただろうか (Hdt. 6. 32 : 反乱が失敗したあと「かくしてイオニア人は三度奴隷化された」とヘロドトスは指摘している)。ダレイオスはサモスを征服しその支配権を僭主の手に委ねなかつただろうか (Hdt. 3. 149)。またイオニア人の反乱を鎮圧し、マラトンに遠征軍を派遣しなかつただろうか (Hdt. 6. 31. 1-32 : イオニア制圧と処理; 94. 1ff : マラトン遠征)。このようにクセルクセス以前のペルシア王は大なり小なりギリシア世界を脅かし続けている。それ故、ギリシアの自由を脅かし、ギリシア人と干戈を交えた為にクセルクセスがギリシア人によって貶められたのだとは言えないように思われる。

サラミスの海戦に敗れ、更にその配下の将兵がプラタイアとミュカレーの戦いに敗れたのでクセルクセスが否定的に評価されるのだろうか。軍の先頭に立って遠征し、大敗北を喫したのはクセルクセスが初めてではない。キュロスは中央アジアのマッサゲタイ人の国土に侵攻して敗れ、戦死している (Hdt. 1. 214. 3. Cf. Ctes. *Persica* F9 (7)=FGH. 688 F9 (7))。カンビュセスはエジプトを征服したあと、エチオピアとカルタゴに派遣した遠征軍を失っている (Hdt. 3. 25. 1-26. 3. Cf. Brown, 1982, p.403: ブラウンはエチオピア遠征を架空の物語とみなしている。エチオピア遠征の歴史性についての議論については Asheri et al. 2007, p.424)。ダレイオスはスキュタイア遠征に失敗し、多くの将兵を置き去りにして辛うじてスキュタイ人の虎口を免れたのである (Hdt. 4. 135. 3. Cf. Ctes. *Persica* F13 (21)=FGH. 688 F13 (21).)。つまりアケメネス朝初期の歴代の王は何れも偉大な軍事指揮官であると同時に敗軍の将でもあった。クセルクセスがギリシア遠征に失敗したことは帝国の歴史において珍しいことではなかった。

では何故クセルクセスはギリシアの文献においてかくも否定的にしか評価されてこなかったのだろうか (Isoc. *Ep.* II, 7 はクセルクセスに関して例外的な評価を下している)。その鍵はアテーナイにある。シケリア遠征において、アテーナイの使節エウペーモスがカマリーナで演説した際、アテーナイによる帝国支配の正当性はペルシア戦争におけるアテーナイの貢献にあることを強調している (Thuc. 6. 82. 3- 83. 2. cf. Thuc. 1. 73. 2- 75. 5; Isoc. 12. 49)。ペルシアの手先としてギリシアに攻め込んできたイオニア諸都市をアテーナイが支配し、デロス同盟の同盟主として指揮権を独占し、同盟諸国の自由を奪い、強大な帝国を堅持する正当事由としてペルシア戦争においてアテーナイこそが自由の最大の功労者であったことを挙げている。これはアテーナイの帝国支配を正当化するプロパガンダであるが、そのプロパガンダの中でクセルクセスはギリシア人の理想像の対極でなければならなかった。アテーナイがデロス同盟を唱道してエーゲ海の島嶼部や小アジア沿岸の諸都市に参加を呼び掛けるとき、彼らが対峙している敵がいかにも邪悪であり、その外見とは異なって内実はいかに柔弱であるのかを宣伝する必要があったと考えられる (Hdt. 5. 49. 3- 7: この先例としてミレトスのアリスタゴラスを挙げることができる。アリスタゴラスはアテーナイの民会においてペルシアによる支配がイオニア人の奴隷化であること、ペルシア帝国が如何に豊かで富に恵まれていて、戦においては柔弱であるのかを強調している)。そのような敵のイメージとしてクセルクセスは最適の人物であった。